

# 麦の需給に関する見通し

平成 2 9 年 3 月

**農林水産省**

## 目 次

### 麦の需給に関する見通し

麦の需給に関する見通しの策定の考え方	1
1－1 食糧用小麦の総需要量	1
1－2 国内産食糧用小麦の流通量	2
1－3 米粉用国内産米の流通量	3
1－4 外国産食糧用小麦の需要量	4
1－5 外国産食糧用小麦の備蓄目標数量	4
1－6 外国産食糧用小麦の輸入量（政府からの販売数量）	4
2－1 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量	5
2－2 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量	6
2－3 外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量	7
2－4 外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）	7

#### 【麦の需給に関する見通しの策定について】

主要食糧の需給及び価格の安定に関する法律（平成6年法律第113号）第41条に基づき、農林水産大臣は、麦の需給及び価格の安定を図るため、毎年3月31日までに、麦の需要量、生産量、輸入量、備蓄数量等に関する事項を内容とする「麦の需給に関する見通し」を定めることとなっています。

## 麦の需給に関する見通し

### 麦の需給に関する見通しの策定の考え方

麦の需給については、国内産麦では量的又は質的に満たせない需要分について、国家貿易により外国産麦を計画的に輸入することとしています。

平成29年度の麦の需給に関する見通しについては、近年の総需要量や国内産麦の流通量の実績等を踏まえ、以下のとおりとします。

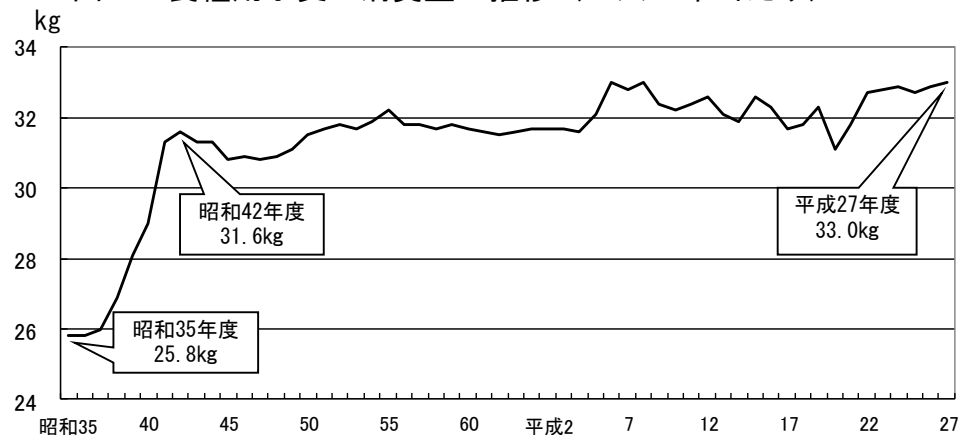
### 1-1 食糧用小麦の総需要量

近年、食糧用小麦の1人当たりの年間消費量は、概ね31～33kgで安定的に推移している中（図1）、総人口についても、ここ数年では大きな変動がみられません。

このため、食糧用小麦の総需要量<sup>(注)</sup>は、短期的な変動はあるものの中期的には安定していることから、平成29年度の食糧用小麦の総需要量は、過去7か年（平成22年度から平成28年度まで）の平均総需要量である572万トンと見通します（表1）。

（注）食糧用小麦の総需要量は、国内産食糧用小麦の流通量及び政府からの外国産食糧用小麦の販売数量の合計である（以下同じ。）。

図1 食糧用小麦の消費量の推移（1人1年当たり）



資料：農林水産省「食料需給表」

注：平成27年度の数値は概算値である。

表1 食糧用小麦の総需要量の推移

（単位：万トン）

年度	総需要量	対前年度比
平成22	555	99%
23	570	103%
24	608	107%
25	525	86%
26	606	115%
27	568	94%
28見込み	571	101%

29年度見通し  
572万トン  
(過去7か年平均)

## 1-2 国内産食糧用小麦の流通量

### (1) 国内産食糧用小麦の供給量（当年産の小麦のうち、生産者から実需者に引き渡される数量）

平成29年産の国内産食糧用小麦の供給量<sup>(注1)</sup>は、平成28年8月の民間流通連絡協議会において報告された平成29年産の作付予定面積（209千ha）に、過去5か年（平成24年産から平成28年産まで）の10a当たりの収量のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値（399kg）を乗じ、さらに、食糧用供給割合（98.2%）<sup>(注2)</sup>を乗じて、82万トンと見通します（表2）。

(注1)は種前契約に基づき、生産者から実需者に引き渡される数量である。

(注2)当年産のうち、食糧用として生産者から実需者に引き渡される割合（それ以外は、種子用、規格外等）。平成29年産については、過去5か年（平成24年産から平成28年産まで）のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値である。

### (2) 国内産食糧用小麦の流通量（前年産と当年産の食糧用小麦のうち、当年度内に市場に流通する量）

平成29年度の国内産食糧用小麦の流通量は、平成29年産の国内産食糧用小麦の供給量に、年度内供給比率<sup>(注3)</sup>を乗じ、さらに、平成28年産国内産食糧用小麦の在庫量を加えて、82万トンと見通します（表2）。

(注3)当年産の供給量のうち、当年度内に生産者から実需者に引き渡される数量の割合。平成28年産について、実需者から提出された平成28年産麦の購入計画から算出し、平成29年産については、過去最大の生産量となり年度内供給比率が例外的に低くなった平成27年産を除いた直近3か年（平成24年産から平成26年産まで）の実績値の平均値としている。

表2 国内産食糧用小麦の流通量の推移

(単位：万トン)

年産	食糧用小麦の供給量 ①	うち年度内供給量 ②	年度内供給比率 ②/①	次年度繰越(在庫) ①-②
平成24	81	38	46.7%	43
25	77	28	36.9%	48
26	81	33	40.8%	48
27	95	27	28.5%	68
28見込み	72	24	33.7%	48
29見通し	82	34	41.5%	
29年度流通量見通し				82

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

### 1-3 米粉用国内産米の流通量

平成28年産の米粉用米の供給量（取組計画認定数量）は1.8万トン、持越在庫は0.5万トンと見込まれます。

米粉用米は、市場規模がまだ小さく、平成29年産の米粉用米の供給量等を現段階で予測することは困難であることから、平成29年度の米粉用国内産米の流通量は、平成29年度の供給量、出回り比率及び在庫量のいずれも、平成28年度と同数を見込み、平成27年産以前の米粉用米在庫の使用量0.5万トンと合わせ、2.3万トンと見通します（表3）。

表3 米粉用国内産米の流通量の推移

(単位：万トン)

年 産	米粉用米の供給量 ①	年度内出回り比率 ②	米粉用米の年度内供給量 ①×②	次年度繰越(在庫)
平成27年産以前の米粉用米在庫使用量				0.5
28	1.8	75.0%	1.3	0.5
29見通し	1.8	75.0%	1.3	0.5
29年度流通量見通し				2.3

注1) 平成28年産の供給量は取組計画認定数量。

注2) 出回り比率は、新米の出回り時期を踏まえ、前年産が当年4～6月、当年産が7月～翌年3月までとして算出したものである。

#### 1-4 外国産食糧用小麦の需要量

平成29年度の外国産食糧用小麦の需要量は、同年度の食糧用小麦の総需要量572万トンから国内産食糧用小麦流通量82万トン及び米粉用国内産米流通量2万トンを差し引いて488万トンと見通します（表4）。

#### 1-5 外国産食糧用小麦の備蓄目標数量

現在、不測の事態に備え、国全体として外国産食糧用小麦の需要量の2.3か月分の備蓄を行っています。

このため、平成29年度の備蓄目標は、93万トンとします（表4）。

なお、民間の実需者が2.3か月分を備蓄する場合、そのうち1.8か月分について、国が保管料を助成します。

#### 1-6 外国産食糧用小麦の輸入量（政府からの販売数量）

平成29年度の外国産食糧用小麦の輸入量は、外国産食糧用小麦の需要量に備蓄数量の増減分を加えた487万トンと見通します（表4）。

なお、飼料用小麦の輸入については、別途、農林水産大臣が定める飼料需給計画に基づき行います。

表4 平成29年度の食糧用小麦の需給に関する見通し

（単位：万トン）

総需要量		A	572
国内産	国内産食糧用小麦の流通量	B	82
	米粉用国内産米供給量	C	2
	計	$D = B + C$	84
外国産食糧用小麦の需要量		$E = A - D$	488
外国産食糧用小麦の備蓄数量			
	28年度（見込み）	a	94
	29年度（目標）	b	93
	増減	$F = b - a$	0
外国産食糧用小麦の輸入量 （政府からの販売数量）		$G = E + F$	487

注：四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。

## 2-1 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量

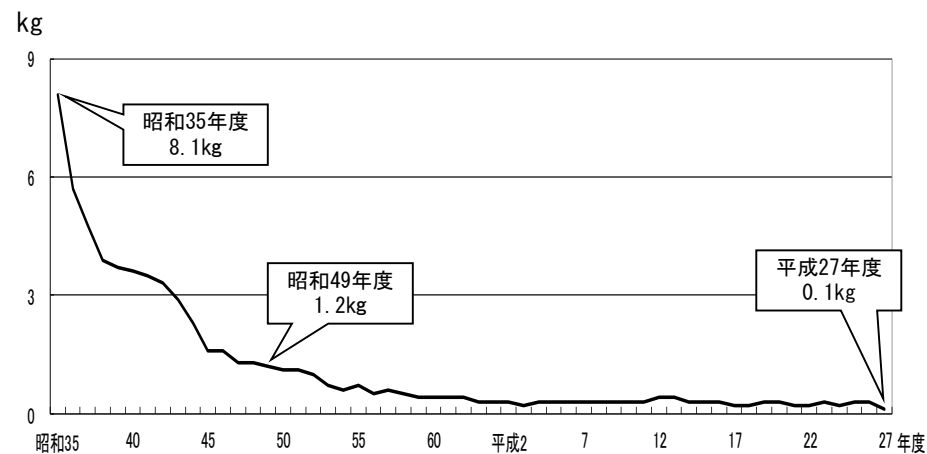
近年、食糧用大麦及びはだか麦の1人当たりの年間消費量は、概ね0.1～0.3kgで安定的に推移しており（図2）、総人口についても、ここ数年では大きな変動がみられません。

他方、平成28年度をみると、健康志向等を背景に大麦及びはだか麦への需要が増加傾向にあります。実際に、はだか麦の輸入量が前年度に比べ約1万トン増加しており、特に、水溶性食物繊維（大麦β-グルカン）が豊富なもち性はだか麦の輸入量が増加するなど、過去のトレンドとは異なる動きもみられるところです。

このため、平成29年度の食糧用大麦及びはだか麦の総需要量<sup>(注)</sup>については、中期的な動向をベースとしつつ、足元の動きを的確に反映する観点から、過去7か年（平成22年度から平成28年度まで）の平均総需要量に、平成28年度に前年度と比べ増加したはだか麦の輸入量を加え、34万トンと見通します（表5）。

（注）食糧用大麦及びはだか麦の総需要量は、国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量並びに政府からの外国産食糧用大麦及びはだか麦の販売数量の合計である。ただし、生産者団体とビール会社との契約栽培により供給される国内産ビール大麦は含まない（以下同じ。）。

図2 食糧用大麦及びはだか麦の消費量の推移（1人1年当たり）



資料：農林水産省「食料需給表」  
注：平成27年度の数値は概算値である。

表5 食糧用大麦及びはだか麦の総需要量の推移

（単位：万トン）

年度	総需要量	対前年度比
平成22	33	98%
23	31	95%
24	34	111%
25	31	89%
26	35	113%
27	33	95%
28見込み	36	109%

29年度見通し  
34万トン

過去7か年平均  
(33万トン)  
+  
はだか麦の  
輸入増加分  
(1万トン)

## 2-2 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量

### (1) 国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量（当年産の大麦及びはだか麦のうち、生産者から実需者に引き渡される数量）

平成29年産の国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量（注1）は、平成28年8月の民間流通連絡協議会において報告された平成29年産の作付予定面積（二条大麦30千ha、六条大麦18千ha、はだか麦5千ha）に、過去5か年（平成24年産から平成28年産まで）の10a当たりの収量のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値（二条大麦293kg、六条大麦287kg、はだか麦246kg）を乗じ、さらに、食糧用供給割合（二条大麦54.1%、六条大麦88.1%、はだか麦97.6%）（注2）を乗じて、10万トンと見通します（表6）。

（注1）は種前契約に基づき、生産者から実需者に引き渡される数量である。

（注2）当年産のうち、食糧用として生産者から実需者に引き渡される割合（それ以外は、ビール用、種子用、規格外等）。平成29年産については、過去5か年（平成24年産から平成28年産まで）のうち、最高及び最低を除いた3か年の平均値である。

### (2) 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量（前年産と当年産の食糧用大麦及びはだか麦のうち、当年度内に市場に流通する量）

平成29年度の国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量は、平成29年産の国内産食糧用大麦及びはだか麦の供給量に、年度内供給比率（注3）を乗じ、さらに、平成28年産国内産食糧用大麦及びはだか麦の在庫量を加えて、10万トンと見通します（表6）。

（注3）当年産の供給量のうち、当年度内に生産者から実需者に引き渡される数量の割合。平成28年産について、実需者から提出された平成28年産麦の購入計画から算出し、平成29年産については、年度内供給比率が例外的に低くなった平成27年産を除いた直近3か年（平成24年産から平成26年産まで）の実績値の平均値としている。

表6 国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量の推移

（単位：万トン）

年産	食糧用大麦及びはだか麦の供給量 ①	うち年度内供給量 ②	年度内供給比率 ②/①	次年度繰越（在庫） ①-②
平成24	9	3	30.1%	7
25	11	4	35.2%	7
26	10	3	31.1%	7
27	10	3	25.2%	8
28見込み	9	2	25.2%	7
29見通し	10	3	32.1%	7
29年度流通量見通し				10

注：1）国内産食糧用大麦及びはだか麦については、上記の流通量10万トンのほかに生産者団体とビール会社との契約栽培により国内産ビール大麦6万トンが供給される見込みである。

2）四捨五入の関係で、計と内訳が一致しないことがある。



### 2-3 外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量

平成29年度の外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量は、同年度の食糧用大麦及びはだか麦の総需要量34万トンから国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量10万トンを差し引いて24万トンと見通します（表7）。

### 2-4 外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）

平成29年度の外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量は、外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量と同量の24万トンと見通します（表7）。

なお、飼料用大麦の輸入については、別途、農林水産大臣が定める飼料需給計画に基づき行います。

表7 平成29年度の食糧用大麦及びはだか麦の需給に関する見通し

（単位：万トン）

総需要量	A	34
国内産食糧用大麦及びはだか麦の流通量	B	10
外国産食糧用大麦及びはだか麦の需要量	$C = A - B$	24
外国産食糧用大麦及びはだか麦の輸入量（政府からの販売数量）	$D = C$	24